

中東 2004年6月25日

「バグダットの解放は近い」

筆者：Alix de la Grange

編集注記：木曜日にイラクの複数の都市で発生した同時攻撃や武力衝突により、少なくとも66名が死亡し250名以上が負傷した。モスル北部の都市では一連の自動車爆弾の爆発により、44名が死亡し216名が負傷した。ファルージャとラマディで戦闘があったアルアンバール州では、少なくとも死者9名、負傷者27名を出し、バクバ周辺の戦闘では13名が死亡し、15名が負傷した。

バグダッド – 6月30日のいわゆるイラク暫定新政府への主権移譲を目前に控えて、イラクのレジスタンス運動の精鋭メンバーとなったサダム・フセイン政権下の旧イラク軍幹部が一時その秘密の地位から離れて、一連の出来事について彼らの言い分を説明し、計画を話してくれた。これらのバース党幹部によると、イラクではこれから「大きな戦闘」が起きるはずだとのことである。

「米国は、戦争に備えてきたが、我々は、戦後に備えてきた。6月30日の権限移譲によって我々の目的が変わることはない。米国が指名したこの暫定新政府は、我々の目には何の正当性もない。彼らは、傀儡でしかない。」

なぜこれらの旧イラク軍幹部が表舞台に登場するのを長い時間かけたのだろうか？「なぜならば、今日、我々が勝利することに確信しているからである。」

#### 秘密の会合

パレスチナホテル、火曜日、午後3時。正式に要請した1週間後には、レジスタンス組織と話せる見込みが薄くなっていた。何度も行き詰まりを感じたが、ついに面識のない一人の男が我々のテーブルに慎重に近づいて来た。「まだレジスタンス組織のメンバーに会いたいのか？」とその男は、私の同僚のアラブ人女性ジャーナリストに話し掛けた。彼女は、何度もイラクに入国した経験がある。会話は短く、「明朝、バベル・ホテルで会おう」と言って、その男は姿を消した。予想に反して、このコンタクトがこれまでで一番信頼できそうであった。

バベル・ホテル、水曜日、午前9時。外国から来た米国の傭人が群がるサイバーカフェの入口で、前日出会った男が次のように指定した。「明日10時、アルサードウン通り、パレスチナホテルの前。ドライバーを同行しないこと。」

木曜日の朝にタクシーで集合場所に着いた。橋渡し役の彼がそこにいた。簡単に「サラーム・アライクム (Salam Alekum)」と挨拶を交わした後に、彼の車に乗り込んだ。「どこに行くのか」と尋ねたが返事はなかった。

車は、2時間以上走った。バグダッドでは、軍のチェックポイントによる完全封鎖がない場合でも、交通渋滞は、慢性的な現象である。1年で30万台以上の車がこの国に密輸入さ

れた。2台に1台はナンバープレートがなく、ほとんどのドライバーは、「運転免許証」の意味さえ知らない。

「もうすぐ目的地に着く。バグダッドに詳しいか」とその男が尋ねた。答えは、明らかにノーである。不規則に広がる都市に慣れるには、自由に歩き回る必要がある。犯罪行為がウィルスのように広がり、拉致が横行し、占領軍に対する攻撃が日に50～60回もあり、米軍が無差別に応戦する状況では、歩こうという気にはならない。

ある裏通りで、ウィンドウを着色したミニバスの近くで車が止まった。そのミニバスのドアの一つが開いた。車内には3人の男とドライバーがいて、周辺の全ての通りと家々を注意深く見張っていた。我々は、何に遭遇したか全く検討がつかなかったが、相手は、我々のことをよく知っているようであった。「面談を始める前に、我々の身元について疑問を持ってもらっては困る」と、彼らは言い、ホコリを被ったプラスチックアッグから何枚かの文書を取り出した。それらは、身分証明書、軍人身分証明書、軍服姿の彼らとサダム・フセインと一緒に映った数枚の写真であった。彼らのうち2人は、解体された旧イラク軍の大將、1人が大佐で、何か月も連合軍の諜報機関に追われ逃亡生活を続けている。

「我々は、現在、西欧のメディアに出回っている幾つかの情報を修正したいと思っている。それが理由で、あなた方と会うことにした。」我々の面談は、3時間以上に及んだ。

#### バグダッド陥落に溯る

「米国がイラク攻撃を決めた場合、彼らの技術力と軍事力の前に我々には、勝ち目がないことは分かっていた。戦争が始まる前から負けは分かっていたので、戦後、すなわち、レジスタンス運動に備えた。広く語られている説は間違いで、我々は、2003年4月5日に米軍がバグダッド中心部に侵攻した後に脱走したのではない。我々は、サダム・フセインではなく、イラクの名誉のために数日間は戦ったが、最終的に離散するようとの命令を受けた。」そのため、バグダッドが4月9日に陥落した時には、サダムと彼の軍隊の姿はなかった。

「予測したとおり、戦略ゾーンがすぐに米国とその同盟軍の支配下に落ちてしまったが、我々の側にとっては、計画を実行する時であった。占領に対する反対運動は、既に組織されていたし、我々の戦略は、政権が倒された後に間に合わせて用意したものではない。」米国の監視の目を完全にかすめたとされるこの計画Bは、これらの幹部によれば、2003年3月20日にイラク自由作戦(Operatoin Iraqi Freedom)が開始される前に数年ではないとしても数ヶ月かけて慎重に計画されたものである。

目的は、「イラクの解放と連合軍の放逐。さらには、我々の主権を取り戻し、米国に押し付けられたものではない非宗教的民主主義を導入することにあつた。イラクは、常に進歩的な国であったし、我々は、過去には戻らず前進したい。我が国には非常に有能な人材が揃っている」と3人の策略家は、語った。秘密のネットワークに関しては、勿論、名前や正確な数は分かっていない。「十分な人数がいる。不足しないものの一つがボランティアで

ある。」と彼らは言った。

#### ファルージャ

レジスタンス運動に関して言えば、3月のファルージャでの米軍による攻撃で死者が出た事件が転機となった。捜索ミッションに携わった米軍兵士による無差別の強奪（多くの証人が証言している）やバグダッドのアブグレイブなどの刑務所での囚人への性的屈辱は、多くのイラク人の怒りを増幅するという結果をもたらした。「もう信頼心はない。信頼を取り戻すことは難しいであろう。」レジスタンス運動のリーダー達はこう語る。「後戻りできないところまで来てしまった。」

これは、我々が2日前に出会ったシーア派の女性（元内密の反サダム・フセイン闘士）の意見と全く同じである。その意見とは、以下である。「占領軍の最大のミスは、我が国の伝統と文化を侮辱したことである。彼らは、我が国のインフラを爆破するだけでは足りず、我が国の社会制度や威信まで破壊しようとした。我々は、それを許すことはできない。傷は深く、これが癒えるには時間が掛かるであろう。我々は、外国による占領の屈辱の下で生きるよりも同胞によるテロの恐怖の下で生きる方を取る。」

旧イラク軍幹部によれば、「この戦争が始まって1年以上になるが、イラク全土が依然、政情不安と無政府状態にある。この状態を掌握し、約束を守ることができない米軍は、イラクの全国民を敵に回している。レジスタンス運動に加担するのは2、3千人の活動家だけではない。全国民の75パーセントが、自発的に情報を提供したり、戦士をかくまったり兵器を隠すのを手伝うという形で、直接的、あるいは、間接的に我々を支援、援助してくれる。しかし、その裏では、連合軍やその協力者に対する作戦で、間接的に損害を与える意味で、多くの一般市民が捕らえられている。

彼らが「協力者」とみなすのは誰か？「イラク人であろうが外国人であろうが、連合軍に協力する者は全員ターゲットである。大臣、傭人、通訳者、ビジネスマン、コック、メイドなど、協力の度合いは関係ない。占領軍との契約に署名することは、死亡証明書に署名することを意味する。イラク人か否かに関係なく、上記は、裏切り者とみなす。我々は、戦争中であることを忘れてはならない。」

レジスタンス組織が様々な手段で妨害してきた結果、連合軍が提案する政府の主要ポストの候補者リストは、縮小の一途を辿っている。13年間の禁輸と2回の戦争で荒廃したこの国では失業が重大な問題である。専門的な活動の再開が妨げられている理由は、こうした環境の混乱だけではない。米軍がすぐにこの状況に閉口し、旧バース党員（警官、シークレットサービスエージェント、軍人、石油省官吏）を元のポストに戻す決断をせざるを得ないとしても、全員がこれに該当するわけではない。L・ポール・ブレマー行政官が2003年5月16日に発したバース党とバース主義をイラクから一掃する指令の被害者の大半は、まだ潜伏している。

## ネットワーク

レジスタンス組織は、主にバース党员（スンニ派とシーア派）から構成されるが、「信仰、民族、政治で区別をせずに、国内のあらゆる対占領軍抗争の動きを分類し直している。西欧で想像されている事は間違いで、イラクでは同胞間の戦争というものは起きていない。我々は、敵に対して統一前線を有する。ファルージャからラマディまで（ナジャフ、カルバラ、バグダッド郊外のシーア派地区が含まれる）戦士は、一致団結している。若いシーア派リーダーのムクタバ・アルサドルについて言えば、彼は、我々同様、多信仰でアラブ人としてのイラク国民の統一を支持しており、我々は、戦術や兵站業務の面から彼を支援する。」

イラクの全ての地域が独自の戦士を擁し、各党派が自由にターゲットと手法を選択できる。しかし、時間と共に、彼らの行動は、ますます組織化されている。どの組織が最も多くの米国人を抹殺するかという点を除き、これらの各種組織間には抗争がないと旧イラク軍幹部は主張する。

## 保有兵器

「攻撃は、綿密に準備する。攻撃は、20分以上続けるべきではなく、イラク市民を巻き込むリスクを回避するためになるべく夜間または早朝に作戦を実行する。」彼らは、我々の次の質問を予想してこう述べた。「いいえ、我々は、大量破壊兵器を保有してはいない。ただし、5千万個以上の通常兵器を保有している。」サダムの主導で、戦争が開始されるはるか以前に実際の保有兵器をイラク全土に隠した。重砲、戦車、ヘリコプターはなかったが、カチューシャ、迫撃砲（イラク人は haoun と呼ぶ）、対戦車地雷、ロケット推進てき弾発射筒、他のロシア製ロケット弾発射筒、ミサイル、AK47、あらゆる種類の大量の予備弾薬があった。ただし、リストは、決して広範なものではない。

しかし、最も有効な兵器は、カミカゼ部隊が保有する。この特別部隊は、90パーセントがイラク人、10パーセントが外国兵で、しっかりと訓練を受けた5000名以上の男女から構成される。彼らは、口頭命令だけで爆弾を積んだ車で自爆する用意がある。

保有する兵器が減少したらどうするか？「心配ない。以前より自前の兵器を製造している。」彼らから聞いたのはこれだけである。

## 責任に関する主張

「確かに、3月にファルージャで米国の傭人を処刑した。しかし、米兵は、通常、20分以内に遺体を片づけるのに、その時は4時間も遺体を放置した。その2日前に、若い既婚女性が恣意的に逮捕された。この事件により、ファルージャ市民の堪忍袋の緒が切れた。それで、彼らは、4遺体にその怒りをぶつけたわけである。生きているイラクの囚人が米国人から受けた虐待の方がはるかにひどい。」

2003年9月22日に外交官でありイラク統治評議会メンバーであるアキラ・アルハシミ氏

を死に至らせた自爆攻撃も、今年 5 月 17 日にグリーンゾーン（レジスタンス攻勢の数からイラク人は、このゾーンをレッドゾーンと呼んでいる）入口で、イラク行政機関の長であるエゼディン・サリム氏を死亡させた自動車爆弾もレジスタンス組織の犯行である。

外国人を拉致したのはレジスタンス組織である。「外国人の拉致は、我々のイメージを傷つけることは承知しているが、この状況を理解してほしい。我々は、我々の領土内に踏み込む人の身元を管理することを強いられている。人道主義者やジャーナリストと証明された人は解放する。スパイ、米国の傭人や協力者であれば、処刑する。この件について、はっきりさせておくが、米国人ニック・ベルグを斬首刑に処したのは、我々ではない。」

2003 年 8 月 20 日に発生したバグダッドの国連本部に対する攻撃については、「我々は、国連を攻撃する命令を発したことはないし、ブラジル人のセルジオ・ヴィエイラ・デ・メロ[この攻撃で死亡した国連特別代表]に対しては大いに敬意を懐いていた。この自爆攻撃を計画したのは、別のレジスタンスグループの出身者である可能性がある。説明したように、我々は、すべてを掌握しているわけではない。しかし、我々が 13 年間耐えてきた禁輸に対しては国連に責任がある点を忘れるべきではない。」

2003 年 10 月 27 日にバグダッドで発生した赤十字に対する攻撃についてはどうか？「これは、我々とは関係ない。我々は、常に、この組織とそこで働く人々に対して深い敬意を懐いていた。長年の間イラク国民を援助してきた数少ない機関の一つを攻撃して、我々に何の利益があるだろうか？ファルージャ市民がこの攻撃の犯行声明を出したことは知っているが、彼らがレジスタンス組織の一員でないことは確かである。また、政治的／経済的理由で、我々の威信を失墜させることに関心を持つ人は多く存在する。」

## 6 月 30 日以降

6 月 8 日に裁決された国連安保理決議第 1546 号は、多くのイラク人の目には別のうそ八百でしかない。まず、外国軍による占領が正式に終結しても、米軍の指揮下にある多国籍軍の駐留が承認されているので、その撤退日は規定されていない。重要な軍事作戦についてはイラク人に拒否権を与えるように、フランス、ロシア、中国は要求したが、それは却下された。ワシントンは、イラク政府とのパートナーシップについては曖昧にしか認めていないし、意見の不一致が発生した場合の解決策は何も考えていない。イラク人は、バカではない。6 月 30 日以降もイラクに米軍が駐留し続けて、米国議会から援助金があるので、この国の本当の支配者が誰かは誰の目にも明らかである。」

北大西洋条約機構 (NATO) が果たし得る役割についてはどうか？ NATO が介入しても、その目的は、イラク国民を助けることではなく、米軍をこの泥沼から助け出すことにある。彼らがイラク国民の幸福を願うならば、もっと以前に行動を起こしていたはずである。」と 3 幹部は、腕時計に目を向けながら言った。もう遅いし、予定していた時間を大幅に超過してしまった。

「米軍が今できないことを NATO 軍が今後できるわけがない。西欧軍は、イラク人に占領

軍と見られてしまうであろう。ジョージ・W・ブッシュと彼の忠実な支持者であるトニー・ブレアは、その点を考えたほうがよい。彼らは、戦いに勝ったとしても、まだ戦争には勝利してはいない。大きな戦いは、まだこれからである。バグダッドの解放は、近い。」

( Copyright 2004 Asia Times Online Ltd. 著作権所有。弊社の販売・シンジケート組織方針に関する情報については [content@atimes.com](mailto:content@atimes.com) に照会ください。)